

研究発表もうしこみフォーム

氏名：巴徳瑪・松岡雄太

氏名のローマ字表記：BADMA/MATSUOKA Yuta

所属：内蒙古大学／関西大学

専門分野：モンゴル語学

発表のタイトル：ホルチン方言の補助動詞「yar(ya)-」の意味と使用制限について

発表要旨（600字～800字程度）：

本発表では、主に内蒙古東部地域で使われているホルチン方言を対象に、補助動詞「yar-（出る）」とその他動詞形「yarya-（出す）」の意味を記述し、さらに本動詞としての語彙的意味の残存によるものと考えられる使用制限があることを論ずる。

清格爾泰(1991)はモンゴル語の補助動詞として「yar-」と「yarya-」を認め、その意味を共に「完成体」と記述した。このうち「yar-」については、斯欽格日樂(2015)がコーパスから収集した用例を、工藤真由美氏が提案した日本語の動詞分類をモンゴル語に適用して分類しつつ、動詞クラスごとに「yar-」の意味をやや詳細に記述している。その要点のうち本発表に関わるのは、①「yar-」の意味は、同じく動作の完了を表す「bara-」と基本的に同じであるが、②一部動詞においては当該動作が起ったあと「元の状態に戻る」という意味を表す、という二点である。ただし、斯欽格日樂(2015)の意味記述には、判断が主観的という問題点があった。

これに対して、本発表では第一に、より客観的な否定証拠のデータを用いながら、「yar-」の意味は「bara-」と同じでなく、そこには「完了した当該動作が行われた同じ場面から導き出される別の動作を含意する（→出る）」というモダリティ的意味が含まれていることを論じる。本発表では第二に、斯欽格日樂(2015)が今後の課題としていた「yarya-」も同時に扱い、「yarya-」の意味もやはり動作の単なる完了ではなく、「完了した当該動作が客体に与えた変化を含意する（→出す）」というモダリティ的意味が含まれていることを論じる。また「yarya-」には、他動詞のみと結合し、無生物主語を許容しないという制限があることも主張する。

以上、「yar-」と「yarya-」は共に本動詞の語彙的意味が制約として残存していることから、本発表では「bayi-（いる・ある）」など他の補助動詞と比べ、「yar-」と「yarya-」はまだ文法化があまり進んでいない形であると結論づける。

【参考文献】

清格爾泰 (1991) 『蒙古語語法』、内蒙古人民出版社

斯欽格日樂 (2015) 「モンゴル語の補助動詞《yar-》の機能について」『日本モンゴル学会紀要』 45: 9-23.